



沖縄本島南部及び 周辺離島の文化財

本島南部及び 周辺離島





那覇市

わたんぢむらあと 渡地村跡

那覇市通堂町



26° 12' 36.68" N
127° 40' 18.91" E



用語解説

●中継貿易

輸入した品物を別の国へ輸出すること。

今も昔も那覇港は、
いろいろな国の船舶が
出入りする重要な港
だったんだね。

ここでは塩田跡も見つ
かっているのだよ。ま
た、中国へ輸出された
タカラガイは、お金と
して使われたと考えら
れているのだよ。



青磁馬上杯

●タカラガイ集中部6



渡地村跡の所在する那覇港は、グスク時代から現在に至るまで、「沖縄の玄関口」として知られる国際貿易港です。渡地村跡は那覇港の北岸にあります。

渡地村は元々浅海に点在する小島の一部でしたが、1700年代には埋め立てによって硫黄城(火薬などの原料となる硫黄の貯蔵施設のある島)と合わさり、一つの島になっていた事が那覇港周辺の古地図からわかります。近年の発掘調査では、それ以前の渡地村の周囲が埋め立てられ、土地が拡大し整備されていった過程を知る事ができました。

また、近世～近代(約400～100年前)の中国・タイ・ベトナム・日本製の陶磁器などが大量に出土しました。その他にも、琉球国から中国へ輸出されたと考えられているヤコウガイやタカラガイ等も集中して出土しました。

これらの調査成果は、琉球国の玄関口である那覇港の一角で、諸外国との中継貿易(中国の陶磁器等を輸入して日本や東南アジアの国々に輸出する)が活発に行われていた様子を私達に垣間見せています。

【参考文献】

・那覇市教育委員会. 2012. 『渡地村跡』.

発掘調査風景



埋め立てられる以前の那覇港の様子を伝える遺跡



青磁集中部1



青磁集中部2



那覇市

湧田古窯跡

那覇市泉崎1丁目



26° 12' 44.29" N
127° 40' 49.96" E



用語解説

●『球陽』

王統・年月順に政治、天変地異、文化等に関する出来事を記録した琉球の正史。尚敏王代の1745年には完成したが、1876年まで追記が行われた。外巻に『遺老説伝』がある。

●朝鮮人陶工

首里王府の要請によって薩摩藩（現在の鹿児島県）から1616年に渡来した3名の朝鮮人。2名は帰国したが、張献功は帰化し、湧田村に家屋敷を与えられ、製陶技術を教えた。

●平窯

燃焼室（薪を燃やす場所）とひとつの焼成室（陶器を並べる場所）からなる窯。

●登窯

傾斜地に数個の焼成室を連結した窯。薪を燃やした火炎と廃熱が順次昇っていき、熱効率がよいことから、大量に焼くことができる。

●瓦質土器

泥質で灰色の土器。沖縄では17世紀に湧田窯で焼かれたものが多い。

遠景（現在の県民広場及び地下駐車場）



湧田古窯跡は、琉球国時代の代表的な陶器生産地で、その範囲は現在の那覇市泉崎から壺川まで広がっていたようです。歴史書『球陽』などによると、1616年に薩摩から招いた朝鮮人陶工が湧田で技術指導を行ったとあり、沖縄における陶器生産発祥の地とも伝えられています。

沖縄県教育委員会が1986～1995（昭和61～平成7）年に実施した県庁舎建設に伴う発掘調査の結果、瓦や陶器を焼いたと考えられる煉瓦造りの平窯と土造りの登窯、失敗品を捨てた穴、粘土を採った跡、建物や井戸、陶器生産以前の窯業製品である瓦質土器など、かつての一大窯業地「湧田」の様子を示す遺構や遺物が多数発見されました。

現在、その場所には沖縄県庁等が建ち並んでおり、当時の様子をうかがう事はできませんが、行政棟近くの説明板が、この場所に湧田古窯跡があったことを示しています。また、発掘調査中に切り取り保存処理された2基の平窯が、沖縄県立博物館・美術館と那覇市立壺屋焼物博物館で展示・公開されています。

【参考文献】

- ・沖縄県教育委員会。1993。『湧田古窯跡（I）』。
- ・沖縄県教育委員会。1995。『湧田古窯跡（II）』。
- ・沖縄県教育委員会。1997。『湧田古窯跡（III）』。
- ・沖縄県教育委員会。1999。『湧田古窯跡（IV）』。

● 調査風景（現在の県議会棟）



今の沖縄県庁
あたりにあった
遺跡なんだね。



琉球の陶器生産発祥を伝える遺跡



● 廃棄土坑（現在の県警察棟）



● 平窯（現在の県行政棟）



一大窯業地「湧田」の名にふさわしく、平窯跡や工房跡から大量の瓦や陶器が見つかったのだよ。これは沖縄で焼かれた陶器の研究に役立っているのだよ。



● 瓦質土器

那覇市

壺屋古窯群

那覇市壺屋



26° 12' 52.37" N
127° 41' 32.71" E



用語解説

●知花焼

沖縄市知花で焼かれていた焼物。

●湧田焼

湧田村（現在の那覇市泉崎周辺）で焼かれていた焼物。

●宝口焼

宝口（現在の那覇市首里儀保町の宝口樋川付近）で焼かれていた焼物。

●荒焼

沖縄陶器の種類。無釉もしくは泥釉、マンガン釉を掛けた焼締め陶器の総称。

●登り窯

傾斜地に数個の焼成室を連結した窯。薪を燃やした火炎と廃熱が順次昇っていき熱効率がよいことから、大量に焼くことができる。

●南又窯

壺屋に唯一残る荒焼の登り窯。

●上焼

釉薬を掛け1200℃前後で焼成された色彩豊かな陶器。

発掘調査風景



市のほぼ中心に位置する壺屋は、「壺屋焼」の産地として300年を超える歴史を持つ地域です。壺屋焼は1682年に王府により知花焼（沖縄市知花）・湧田焼（那覇市泉崎）・宝口焼（那覇市壺川）の焼き物職人達がこの地に集められたことで始まったとされています。

壺屋古窯群の範囲内では、県指定有形文化財の「壺屋の荒焼のぼり窯」（南又窯）、国指定重要文化財「新垣家住宅」にある上焼の登り窯（東又窯）をはじめとして、現在のところ46カ所の窯跡が確認されています。そのほとんどが近世から近代にかけての窯と考えられ、壺屋一帯での焼き物生産の隆盛ぶりがうかがわれます。

当地では、これまで数回にわたり発掘調査が行われ、窯跡やろくろ跡、そして大量の窯道具や陶器片が出土しています。

【参考文献】

- ・那覇市教育委員会. 1992. 『壺屋古窯群1』.
- ・那覇市立壺屋焼物博物館. 1998. 『壺屋焼物博物館 常設展ガイドブック』.

●東又窯

那覇市壺屋の東側にある登り窯。戦前に築かれた上焼の窯としては唯一、ほぼ完全な形で残っている。

●窯道具

陶器を窯で焼くときに使う道具の総称。

● 第3号窯一括遺物群



沖縄を代表する焼物「壺屋焼」の窯跡が残る遺跡

● 第1号窯



戦前までは県内で使われるほとんどの焼物が、壺屋で生産されていたのだよ。



約300年も前から壺屋では陶器が焼かれています。



● 第2号窯



● 第3号窯